コロナ禍の学術大会で思うこと

国立病院機構千葉医療センター　臨床検査科

植松　明和

新型コロナウイルス感染症の流行により，感染リスク軽減のため，参集型のみの学術大会が著明に減少し，ハイブリッド型（参集+オンライン）やすべてオンラインによる開催が増加しました．講習会や勉強会などは，ウェビナー形式が主流となり，人に会う機会が減り本当に残念に思います．それでも，WEB会議にさえほぼ参加したことのなかった私が，昨年からWEB会議，WEBミーティング，果てはWEB飲み会など，環境の大きな変化に取り残されることなく付いていけていることに驚きを感じています．今までの移動時間やコストは何だったのでしょうか．WEB飲み会を除けば，オンラインで事足りていると思いつつ，人とのつながりの大切さを改めて感じています．

それでは学術大会のオンライン開催をみなさんはどう感じているでしょうか．オンライン開催にはLiveや録画配信，それを組み合わせた配信などの形式がありますが，最大の利点としては現地に行かずとも興味のある講演や発表を気楽に聴講できます．オンデマンドの期間設定があれば，好きな時間に聴講することも可能であり，通信費用はかかりますが交通費はかかりません．質疑応答についてもチャットなどを利用し，リアルタイムさに欠けることもありますが可能です．欠点としては，逆に現地に行けない（名産品が食べられない，観光できない，人と会っての交流ができない），臨場感がない（発表者や聴講者の顔がみられない，リアルタイムの反応を感じることができない），発表者側としては，プレゼンテーションの作成が面倒（リアルタイムとオンデマンド用が両方必要になる場合あり）などが挙げられます．とくにプレゼンテーション作成には，苦労を感じる方が多くいらっしゃると思います．今までは学会当日の受付までに完成させておけば良かったのに，１～２週間程度前までにプレゼンテーションビデオ形式で提出しなければならいケースがほとんどかと思います．このプレゼンテーションビデオの作成が曲者で，こだわればこだわるほど時間がかかります．スライド毎に録画すると，冒頭の声が大きくなりやすく，全体的な言葉の流れに違和感があるように感じる方も多いのではないでしょうか．しかし，聴講者にとってオンライン開催は，対面でのコミュニケーションができない以外は，利点の方が上回るのではないかと思います．

続いてハイブリッド開催ですが，これは実に優れた方式ではないかと思います．主催者側の準備はとてつもなく大変ですが，参加方法を参加者が選べるのはありがたいと思います．遠方のため泊りで行けない，子供の世話があるけど点数は欲しい，会場でコミュニケーションがとりたい，ハンズオンなどの技術講習をLiveでより近くでみたいなど，オンライン参加者は一部のコンテンツに参加できない場合もありますが，すべて参加者の選択次第です．発表者側としても発表形式を選べることもあります．ただし，Liveを録画して，オンデマンド対応も必要ということになると，期間中繰り返し流れることになるので，参考文献や引用など，気を遣ったスライド作りが必要になる場合もあります．

今後，新型コロナウイルスが終息しても学術大会のハイブリッド開催は残るのではないかと思っています．もちろん各学会におけるボランティアや金銭的な問題はありますが，参加方法を選べることから，会員の学術大会参加人数や満足度の向上が見込まれ，会員以外の参加者も増えるのではないかと思います．ただしハイブリッド開催は，大会参加費が高くなる傾向にあるので，各学会の匙加減やプログラムの構築（何をLiveにするか）が試されるかもしれません．私としては，発表者側の面倒は慣れるとして，多くの方が参加しやすい学術大会が各地で開催されることを希望します．既成概念にとらわれず，臨機応変な学会運営こそが，afterコロナに求められる姿なのではないかと感じています．